

polyvinyl chloride

PVC

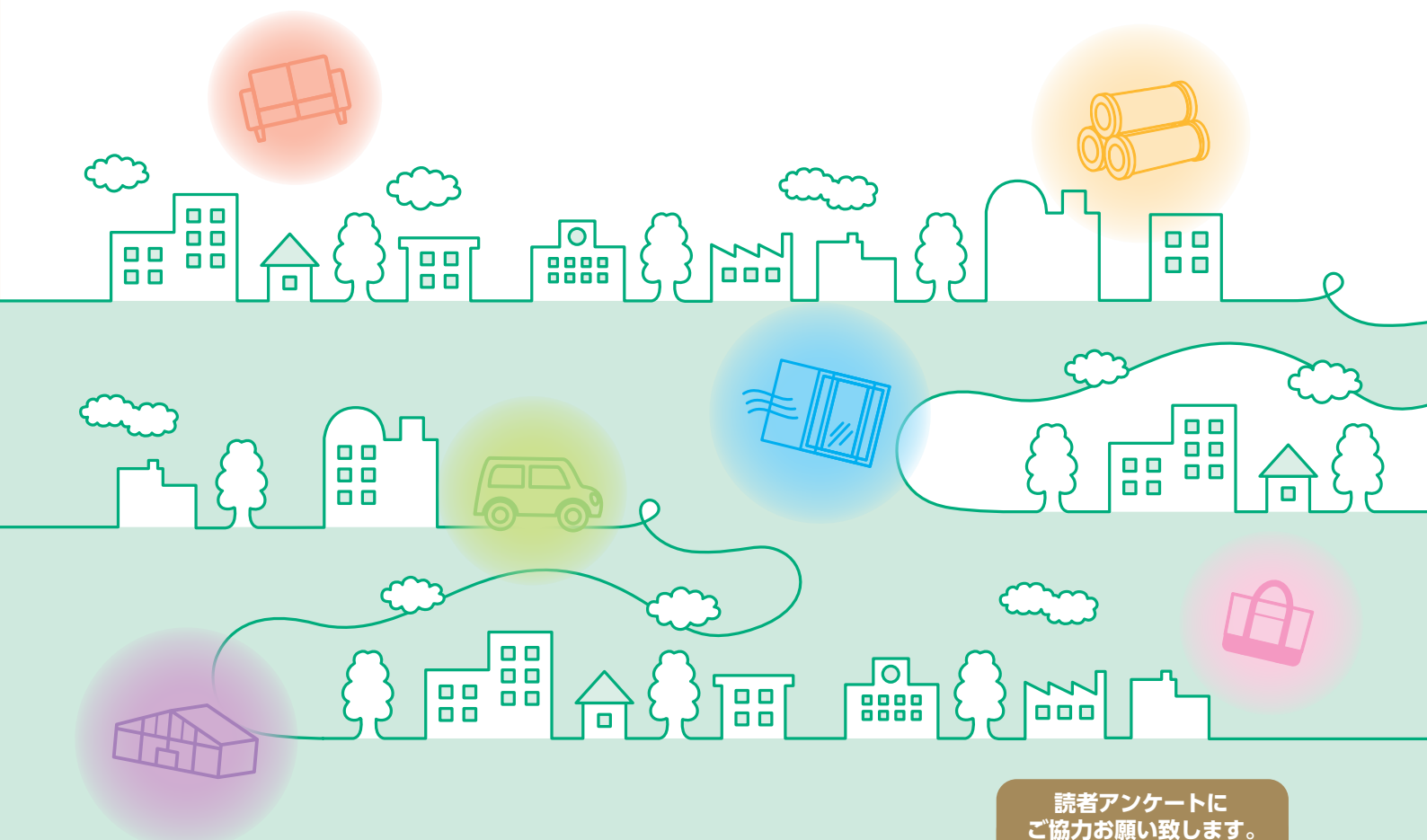
JPEC

Japan PVC Environmental Affairs Council

塩化ビニル環境対策協議会

<https://www.pvc.or.jp>

NEWS



変化の時代、未来は基本にある

▼トピックス

- 02 リサイクル塩ビ管の「環境にやさしい」を数値で証明。
LCA日本フォーラム奨励賞を受賞 塩化ビニル管・継手協会
- 04 人にも環境にもやさしい産業を営むために。
スムーズな規制対応で業界を支える 日本無機薬品協会
- 06 生み出し、組み合わせ、解析する。
開発サイクルを回して多様な製品を作り続ける 住友バークライト株式会社

▼インフォメーション

- 08 見事な発色のカラーチップから、新たなセキュリティ対策まで。
素材に向き合い続けて開く未来 太平化学製品株式会社
- 10 「顔の見える関係」にこだわり続けた20年。
クリエイターのための一大拠点 クリエイティブネットワークセンター大阪 メビック (MEBIC)
- 13 塩ビとファッションが交差する場所。
「第157回プレタポルテ展」開催 学校法人上田学園 上田安子服飾専門学校

ー広報だよりー

- 16 PVCニュース コラム
“中東情勢”という歴史的出来事のなかで、基本に立ち返る

読者アンケートに
ご協力お願い致します。



[https://taylori.com/feedback/
f1ff85e7c73c22736d1b5eed
067e618158db6690/](https://taylori.com/feedback/f1ff85e7c73c22736d1b5eed067e618158db6690/)

7

No.127
July
2026

Topics

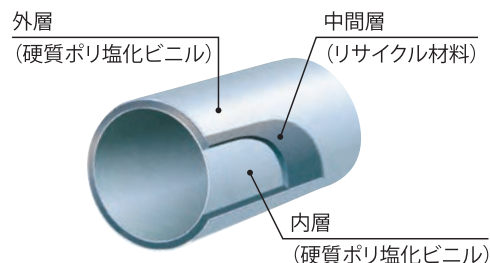
1

リサイクル塩ビ管の「環境にやさしい」を数値で証明。LCA日本フォーラム奨励賞を受賞／塩化ビニル管・継手協会

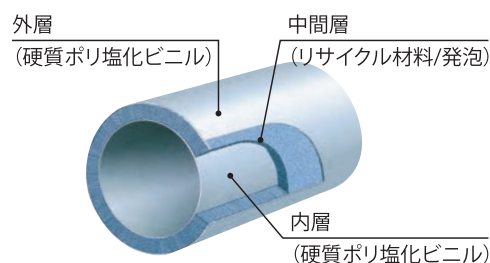
プラスチックのリサイクルが社会的な課題となる中、塩化ビニル管・継手協会は、使用済みの塩ビ管を原料に、同じ塩ビ管として再生させる「パイプからパイプへ」のリサイクルシステムを1998年から構築・運営してきました。環境にやさしいと言われてきたこのリサイクル管ですが、一般的な塩ビ管と比べて実際どれほど環境負荷が低いのか。その答えを数値で明らかにし、効果を見える化する調査が行われました。同協会の専務理事 鈴木謙次郎氏と、技術第二部長 兼 環境部長 井上雅昭氏に今回の取り組みの背景と成果を伺いました。

塩化ビニル管・継手協会

硬質塩化ビニル管、継手、マスマンホールの普及広報やリサイクル活動の推進、技術規格の標準化等を事業とする団体。1954年に「(旧) 塩化ビニル管・継手協会」として設立。2022年にプラスチック・マスマンホール協会、プラスチックリブパイプ協会、C.C.BOX管路システム研究会と統合した。業界の健全な発展を促進し、安心・安全で持続可能な社会基盤の整備に寄与することを目的に活動している。



リサイクル三層管



リサイクル発泡三層管

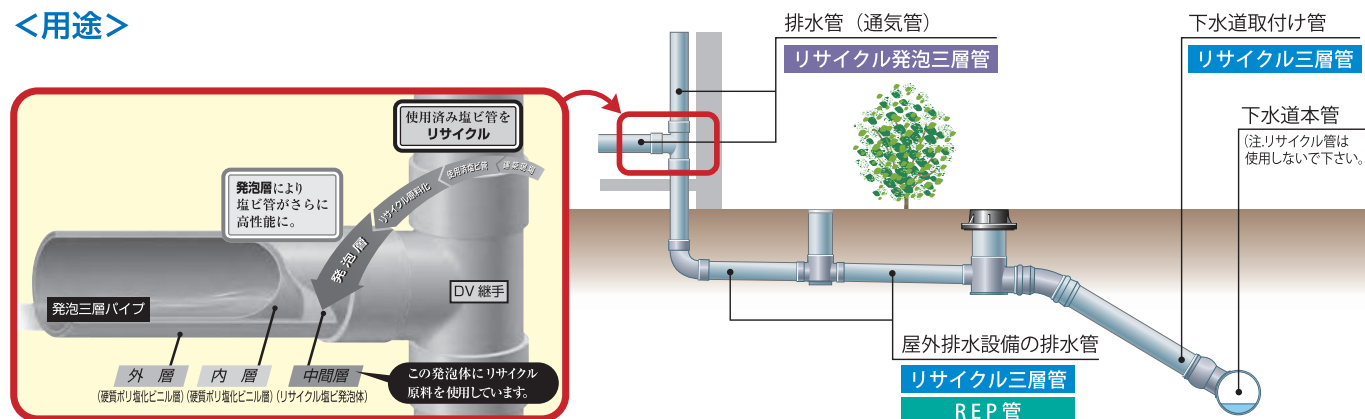
●「パイプからパイプへ」。28年続くリサイクルシステム

かつて、解体や建て替えの現場で発生する廃塩ビ管は、埋立処分されるのが一般的でした。そこで協会は、1998年に廃塩ビ管の受入拠点を整備し、マテリアルリサイクル・システムの構築にいち早く乗り出しました。10箇所から始まった受入拠点は、2026年現在、全国75拠点到

拡大。リサイクル協力会社と連携しながら、年間約2万トンの廃塩ビ管を受け入れ、選別、洗浄、粉碎、造粒等の工程を経てリサイクル塩ビ管の原料を作っています。

これらは新しいポリ塩化ビニル（PVC）樹脂を内外層に使い、リサイクル原料を中間層に用いたサンドイッチ構造の「リサイクル三層管」、中間層を発泡させた「リサイクル発泡三層管」などに生まれ変わります。

<用途>



※リサイクル管は排水・通気用途でのご使用となります。（圧送管には使用しないでください。）



リサイクル塩ビ管は、グリーン購入法の特定調達品目に指定されるなど、環境性能の良さが評価され、独立行政法人 都市再生機構（UR都市機構）や東京都の公共建築物をはじめ、各自治体で採用されています。

「使用済み管を原料として活用することで、新しい樹脂の製造工程が一部不要になります。これが、リサイクル管が環境にやさしいといわれる理由です」と井上氏は語ります。

● ライフサイクル全体で「環境にやさしい」を証明する調査

リサイクル塩ビ管は、通常の塩ビ管とは違うプロセスを経て生まれます。調達から製品化までを通じて、各工程でどの程度環境負荷が減少・増加し、最終的に通常の塩ビ管と比べて環境性能がどの程度良いのか。それを明確な数値で可視化したのが、今回のLCA（ライフサイクルアセスメント）調査です。LCAとは、製品の原料調達から製造、消費、廃棄までの工程で消費されるエネルギーと温室効果ガス（GHG）排出量を定量化する手法で、協会は2024年度に原料調達から管製造までの工程について調査を実施しました。調査対象は「リサイクル三層管」と「リサイクル発泡三層管」の2製品。調査にあたって、未使用のPVC樹脂の調達工程については既存データベースを活用できましたが、リサイクル原料の調達及び管の製造工程についてはまとまったデータがありませんでした。そこで「実際に、リサイクル原料を製造している中間処理業者及び管製造会社からデータを収集しました」と井上氏は語ります。こうして複雑な製造プロセスで分断されたデータをまとめ上げ、正確に評価できる状態を整えていったのです。

● GHG排出量・エネルギー消費量を大幅削減

調査の結果、リサイクル三層管は一般塩ビ管（VU管）と比べてGHG排出量が45%減・エネルギー消費量が33%減、リサイクル発泡三層管ではGHG排出量が65%減・エネルギー消費量が55%減という結果が得られました（口径100mmでの比較）。「リサイクル管では、環境負荷が大幅

に下がることはわかっていました。今回数値として裏付けが取れたことで、改めてその環境性能の良さに確信を持つことができました」と鈴木氏。この調査は2025年度第22回LCA日本フォーラムにおいて、「従来管に比べ大幅なGHG削減であることを評価する。インフラ老朽化対応が急務となる中、リサイクル塩ビ管の普及による社会的波及効果は大きい」とその意義を評価され、奨励賞を受賞しました。

GHG排出量（単位：kg-CO₂eq/m）

口径	φ100	φ150	φ200
リサイクル三層管	1.43	3.25	5.42
VU	2.59	5.87	9.79
リサイクル三層管/VU	55%	55%	55%

口径	φ50	φ75	φ100
リサイクル発泡三層管	0.59	1.17	1.81
VP	1.67	3.28	5.08
リサイクル発泡三層管/VP	35%	36%	36%

エネルギー消費量（単位：MJ/m）

口径	φ100	φ150	φ200
リサイクル三層管	43.7	99.3	165.5
VU	65.0	147.4	245.8
リサイクル三層管/VU	67%	67%	67%

口径	φ50	φ75	φ100
リサイクル発泡三層管	18.9	37.8	58.4
VP	42.0	82.4	127.5
リサイクル発泡三層管/VP	45%	46%	46%

● 環境性能の「見える化」から、普及へ

近年、環境意識の高まりとともに、環境性能の良さを謳う製品やサービスが増えています。中には、実態のない「グリーンウォッシュ」と指摘されるケースも。そうした状況だからこそ、今回のLCA調査で環境負荷の低減効果を数値として明らかにしたことには大きな意味があります。

現在、リサイクル管は製造コストが一般管より高くなるため、採用はUR都市機構や東京都をはじめとした一部の公共機関・自治体が中心です。しかし、科学的に裏付けられた環境性能という確かな根拠が、今後は他の自治体や民間への普及をさらに後押しすることが期待されます。「社会全体でリサイクル素材を積極的に活用する需要が生まれれば、製造コストも下がり、さらに普及が進むという好循環につながっていくはずです」と鈴木氏。同協会は、環境性能重視の機運を追い風に、これからもリサイクル塩ビ管の普及を目指します。

Topics

2

人にも環境にもやさしい産業を営むために。スムーズな規制対応で業界を支える／日本無機薬品協会



お話しいただいた辻本氏

製造業において無機薬品は、製品の機能や耐久性を決定づける不可欠な素材です。自動車、半導体、インフラ設備などあらゆる用途で使われていますが、BtoBの特性から、その重要性は一般にはあまり知られていません。今回は、日本無機薬品協会 業務部長 辻本浩一氏に、無機薬品の役割や働きからお話を伺いました。直近の環境規制への対応や化学物質の開示義務の拡大など、産業の土台を支える協会の活動と、業界が見据える未来についてご紹介します。

日本無機薬品協会

1948年5月、戦後の再建期に、無機工業・無機薬品工業の健全な発展を図ることを目的として設立。無機薬品の製造・販売に関わる企業57社が参加し、18の専門部会を中心に活動している。主な活動として、生産・消費・原材料に関する統計調査・研究、環境安全への対応、技術委員会による年2回の講演会の企画・開催、水道協会などの関連民間団体への参画などを行っている。

● 産業を陰で支える無機薬品

無機薬品とは、炭素骨格を持つ有機化合物に対し、金属元素や各種無機元素からなる化合物の総称です。「酸化亜鉛はタイヤの弾力性や耐久性、耐熱性をあげる加硫促進助剤として、亜酸化銅は船底に塗りフジツボやカキなどの貝や海藻といった海洋生物の付着を防ぐための防汚剤の成分として、それぞれ全く違う用途で使われています」と辻本氏がいうように、無機薬品は、様々な形で製品・産業を支えています。

なかでもポリ塩化ビニル（PVC）と深く関わるのが「塩ビ安定剤」です。PVCは熱で分解しやすいため、安定剤の添加が不可欠です。安定剤を使用しないと、170℃～180℃程度で分解してしまうため、加熱しながらの加工が難しくなります。また、紫外線により変色し、もとの性質が保てなくなってしまう。これらの劣化を抑制するために、塩ビ安定剤が必要なのです。

「ちょっと入れただけで透明になったり色がついたりする。何を入れているかは各社の秘伝のレシピのようなものです」と辻本氏が語るように、無機薬品の働きによって、素材の性質をコントロールするには、高

い技術と積み重ねたノウハウが必要です。

● 多様な産業をカバーする18の部会

協会は18の専門部会から成り立っており、酸化亜鉛・硫酸バンド・PAC（ポリ塩化アルミニウム）・活性炭・過酸化水素・バリウム化合物・塩ビ安定剤など、多彩な分野をカバーしています。扱う製品が異なれば関係する法規制も全く違うため、基本的には各部会が主体となって環境・安全対応を進めているといいます。



日本無機薬品協会 70周年記念講演会

協会全体の活動として特に重要なのが、年に2回開催される講演会。大学の教授などを招き、業界の最先端技術動向を紹介するイベントです。「研究途中の、今まさに生まれつつある潮流を紹介する講演が多いですね。様々な話を聞くことで研究開発の刺激になっています」と辻本氏。電池や半導体などと無機薬品との接点を探る議論も活発で、無機薬品が最先端の産業を縁の下で支えていることを実感させます。

また、会員企業からデータを毎月集計する会報は604号を数え、業界全体の生産動態把握にも長年貢献しています。



生産・消費・原材料に関するデータを集めた会報

● 環境・安全規制の転換と対応

活動のなかで大きなウエイトを占めるのが、環境・安全規制への対応です。工場排水については、「教科書通りに排水の処理を行っても、目的の物質を排水から除去できないことがある」という現実的な困難があります。こうした課題に対し、部会ごとに研究を重ね、官庁や研究機関と連携しながら技術改善を地道に積み上げてきました。

直近では、2024年4月に労働安全衛生法による化学物質規制が大きく転換しました。従来の「具体的な設備導入等を義務づける」手法から、国が定める数値目標のもとで「事業者自らがリスクを評価し、曝露濃度を基準値以下に抑える」という自主管理（自律的管理）へと変わったのです。

これに伴い、リスクアセスメントの実施が義務づけられる対象物質の数が従来の約700物質から約2,900物質へと順次、大幅に拡大されることになりました。国の検討会では毎回20～30もの物質の濃度基準値が審議され、段階的にリストが更新されています。辻本氏は「法の制度設計や数値が固まる段階で、協会に関係する品目のデータを精査して業界の実情を意見として届けることも、私たちの重要な仕事です」といい、協会では不正確な情報がないかを常にチェックしています。これらの活動を通して、業界全体の制度対応を足元で支えているのです。

● 新産業の需要を取り込み、業界をリードする未来

規制対応に追われながらも、業界の目は未来へと向いています。「無機薬品はプラスチックをはじめ様々な素材に機能を与えることができます。サーキュラーエコノミーが進む中で、そこに役立つ新しい無機薬品がきっとあるはず」と辻本氏。実際、電池や水素エネルギー分野など次世代産業においても無機薬品への期待は高まっており、新たな需要が生まれつつあります。資源を持たない日本だからこそ、汎用品の生産から高付加価値のファイン化へと軸足を移し、技術の力で世界をリードするという方向性に活路を見出しています。

あらゆる産業の土台となり、確かに社会を支え続ける無機薬品と、それを結ぶ協会の歩みは、これからも続きます。



Topics

3

生み出し、組み合わせ、解析する。 開発サイクルを回して多様な製品を 作り続ける／住友ベークライト株式会社

1907年にベークランド博士が開発したフェノール樹脂を源流に、100年以上にわたってプラスチック素材の研究・開発・製造を続けてきた住友ベークライト(株)。半導体封止材から医薬品包装フィルム、防水シートまで幅広い製品群を擁し、その一部にポリ塩化ビニル（PVC）が深く関わっているといいます。今回は、総務本部コーポレート・コミュニケーション部の植田毅部長と松澤南欧美氏に、同社の強みと特徴的な塩ビ製品について話を伺いました。



お話しいただいた松澤氏、植田部長

住友ベークライト株式会社

1932年設立。「プラスチックの可能性を広げることで、持続可能な社会を実現する」をパーパスに掲げ、半導体関連材料・高機能プラスチック・クオリティオブライフ関連製品の3事業セグメントを展開。世界39か所に生産拠点を構えるグローバル企業として、ICTやモビリティ、ヘルスケア、食品包装や建築材料を扱うライフイノベーション分野まで幅広い製品を世界中に届けている。

● 半導体から暮らしまで ——3つの事業セグメントを展開

住友ベークライト(株)の事業は3つのセグメントで構成されています。



PVCが使われている「血液バッグ」。
高い機能性と安全性を誇る

「半導体関連材料」は世界シェアNo.1の半導体封止用エポキシ樹脂成形材料をはじめ、最先端の半導体を支える製品群です。培ってきた技術を活用し、現在では電動化が進むモビリティ分野へも展開しています。「高機能プラスチック」は、自動車、航空機、エレクトロニクス向けを中心にフェノール樹脂成形材料などを展開。AI・データセンターやEV（電気自動車）向けの需要の高まりを追い風に、次世代製品の開発も進んでいます。「クオリティオブライフ関連製品」は、医薬品PTP（プッシュスルーパッケージ）包装フィルム、医療機器、防水シートなど人々の暮らしや健康に直接関わる製品群を提供しています。

「私たちが研究・開発・製造した素材が、お客様の製品に組み込まれる形で世の中に届いています」と植田氏がいうように、同社の製品は、BtoB型のビジネスを通して、日々の生活を支えています。

● 設計から加工、評価解析まで一貫して担う強み

住友ベークライト(株)の特徴は、「材料設計」「加工・複合」「評価解析」の3つを自社で一貫して担える技術基盤があること。

「材料設計」では触媒技術を活用することで、新しい機能を持つポリマー・モノマーを合成しています。これにより社会のニーズを捉える素材を自ら生み出すことが可能です。

「加工・複合」では自社で開発した素材や外部から調達した素材を配合・混合し、熱伝導性・電気絶縁性・低誘電性など複数の特性を満たす材料を作り上げています。単一素材では実現できない性能を、素材の掛け合わせによって実現するのが同社の技術力です。

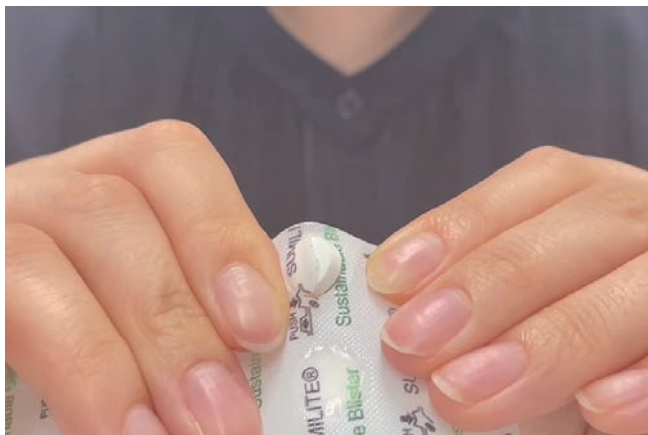
「評価解析」ではシミュレーションや構造解析を活用することで、データを可視化。短期間で、顧客の求める樹脂や複合材料を開発することが可能です。

素材を生み出し、組み合わせ、解析し、それをふまえてまた新たな素材を生み出す。この開発サイクルこそが、住友ベークライト(株)の強みの源泉です。

● PTP包装材から防水シートまで。

PVCが活躍する製品群

クオリティオブライフ関連製品の中で代表的なのが、PVCを使った医薬品PTP包装フィルムです。指で錠剤を押し出すお馴染みの包装フィルムは、同社が1962年から供給を続け、国内では約70%のシェアを誇っています。実は、薬剤ごとに紫外線遮断、防湿、防酸化など求められるバリア機能は異なります。これに対し、



単一素材で作られており、リサイクルが容易な「モノマテリアルPTP」



環境負荷を低減する、バイオマス原料を50%以上使用したPTP包装材料

層構造にすることで複数の機能を同時に実現しています。「最近では高齢者の方から硬いと押せないという声も頂戴しているので、薄くしながらも必要な機能が損われないようにする開発にも取り組んでいます」と植田氏はいます。

また、PVCを使った防水シートも主要領域のひとつです。住宅メーカー向けに国内で高いシェアを誇り、耐候性・長寿命化への要求に応える技術開発を続けています。太陽光発電パネル設置用の防水シートと一体型のアンカー部材も展開しており、「軽量な一体型構造を開発したことで作業者の負担が減り、設置が早く済みます」とメリットを紹介しました。このほか、電車の内装壁材や医療機器カバーにも活用され、それぞれ耐衝撃性や成形のしやすさ、耐薬品性や腐食しにくさなどのPVCの特性を活かした製品を展開しています。

● プラスチックの可能性を広げ、暮らしを支え続ける

フェノール樹脂のパイオニアとして積み重ねた100年超の技術を基盤に、住友ベークライトは半導体から医療・建築まで多様な分野でプラスチック素材の可能性を広げ続けています。PVCもその重要な素材のひとつとして、多様な製品群を通じ、人々の暮らしを確かに支えています。



見事な発色のカラーチップから、新たなセキュリティ対策まで。素材に向き合い続けて開く未来／太平化学製品株式会社

身の回りにあるクレジットカードやビルの冷却設備、マニキュア。そうした製品の素材を製造しているのが、太平化学製品(株)です。競技用ゴーグルの曇り止めシートを日本で唯一生産するなど、戦前から培ってきた技術力と素材への深い知見で、日々の生活から高い水準が求められる環境にまで対応した製品を作り続けています。

今回は取締役 樹脂事業本部長の藤谷昌弘氏と、草加製造部長の西村明広氏に、事業と技術、そしてポリ塩化ビニル（PVC）のリサイクルの取り組みについて伺いました。

太平化学製品株式会社

1908年創業、1938年設立。硝化綿を祖業に、硬質PVCなどのフィルムやシート、プレートを製造販売する合成樹脂部門と、高品質なインキやトナー、コーティング材用原料のカラーチップを製造販売する化成品部門の2部門を展開する。埼玉県川口市に本社・川口工場、草加市に草加工場を置く。



お話しいただいた西村製造部長、藤谷本部長

● 硝化綿製造から生まれた2つの部門

合成樹脂部門を担う草加工場では、硬質PVCをはじめ多様なフィルム、シートを製造しています。一方、化成品部門を担う川口工場では、顔料を微細に分散させたカラーチップを塗料、インキメーカーに提供しています。

現在の2部門体制に至ったきっかけは、1908年の創業時に営んでいた硝化綿製造にまでさかのぼります。当時、硝化綿はラッカー塗料のように板を補強するためのコーティング材やセルロイド板の原料として使用されていました。そこから「色をつけたい」というニーズが生まれてカラーチップへ、燃えやすかったセルロイドに代わって「燃えにくい板が欲しい」というニーズが硬質シートへ展開したのです。顧客や社会のニーズに応えながら技術を広げてきたあゆみが、現在の体制を形作っています。

● 「分散」がカギ。美しい発色を生むカラーチップ

同社の化成品部門の核心は、高分散技術にあります。顔料粒子を超微細化することで、塗料やインキに使った際に高い光沢、透明性、発色が生まれるのです。「カーボンを普通に混ぜるだけだと白けた黒になりますが、超微細に分散することで漆黒のような深みのある黒が出てきます」と藤谷氏。粒子は、細かいほど下地が透けて見えるようになり、銀色のメタリック下地の



光沢が美しい、深みのある発色

上に塗ると、下地の輝きを生かしたまま鮮やかな発色
が得られるのです。これにより通常の顔料では出せない、
透明感と光沢を兼ね備えた色が生まれます。

同社のカラーチップは、マニキュアやインクジェット
インキ、自動車内装塗料など、高い品質が要求される
用途で活用されているといいます。「一般的な塗料
メーカーやインキメーカーに出せない色を出す、顔料
分散の技術を認めていただいている」と藤谷氏は胸を
張ります。

● セキュリティを守る、モノづくりの力

同社が最近開発したのが、レーザー発色に対応した
カード用シートです。クレジットカードや各種IDカード
に使われるこのシート。通常のカードは印刷部を剥
がして新しいものを貼り直せば偽造される可能性があ
りますが、レーザー発色ではシート内部の層だけを焼
き切って情報を書き込むため、改ざんが極めて難し
いといいます。「セキュリティニーズが高まる中で採用が
広がっています」と藤谷氏。このシートは、ここ草加
で研究、開発、製品化されたものの一つです。



レーザーで印字されたカード。細かい陰影で写真も表現できる。

また、クーリングタワー（冷却塔）の充填材も同社
のPVCできています。上から水を垂らしながら下か
ら空気を当てて冷却する装置の内部に、塩ビシートを
成形した部材が使われています。高い耐久性、耐熱性
に加え、コストや成形性、そしてリサイクル性など、
PVCならではの特性が、選ばれる理由になっています。

● 顧客を巻き込んだ循環型リサイクルの取り組み

同社はリサイクルへの取り組みにも力を入れていま
す。草加工場では、シート成形時に発生する端材をそ
の場で回収・粉砕し、同じ原料として再使用する循環シ
ステムを確立し、工場内での廃棄物を削減しています。

それだけでなく、加工会社とリサイクルの取り組み
も進んでいます。例えば、クーリングタワー充填材。
成形加工時に発生した端材をメーカーから回収し、再
粉砕して充填材シートの原料に戻しています。アクリ
ルの照明カバーでも同様のシステムを運用中。各形状
に抜いた残りの材料を顧客に返却してもらい、工場で
粉砕・再生してシートに戻しています。「同じ素材です
から、返していただければもう一度同じ製品にできま
す」と西村氏。素材を無駄にしない設計と回収しやす
い仕組みづくりが、同社のモノづくりの根底を支えて
います。



加工業者から返ってきた素材。
同一の製品の原料として再利用する。



照明カバーの加工時に発生した端材。チップにして再利用する。

高分散技術とシート製造技術を核に塩ビの特性を最
大限に活かしつつ、リサイクルにも取り組む。顧客の
ニーズに応えながら積み重ねてきた技術力を武器に、
太平化学製品の挑戦は続きます。

Information

2

「顔の見える関係」にこだわり続けた20年。 クリエイターのための一大拠点 ／クリエイティブネットワークセンター大阪 メビック (MEBIC)



お話しいただいた堂野所長

大阪市中央区に、クリエイターとクリエイター、クリエイターと企業の出会いを生み出し続ける施設があります。2003年の開設から20年以上、「顔の見える関係づくり」というコンセプトを守り続け、クリエイターの支援を行うMEBICです。これまでに開催したイベントは2,419回（2026年3月時点）、この場をきっかけに生まれたコラボレーションは2025年度だけで601事例を数えるなど、確かな成果をあげています。今回は所長の堂野智史氏に、MEBICのこれまでの足取りと哲学、そして実際のコラボレーションの事例について伺いました。

クリエイティブネットワークセンター大阪 メビック (MEBIC)

2003年5月、大阪市北区の旧水道局庁舎にクリエイター・デザイナー専門のインキュベーション施設として開設。現在は大阪市中央区・大阪産業創造館17Fに拠点を置く。設置主体は大阪市経済戦略局、運営主体は公益財団法人大阪産業局。クリエイターのネットワークづくり、情報発信、ビジネスマッチング、マネジメント能力の向上を支援している。

● 貫いてきた「インフォーマル」の哲学

MEBICが開設された2003年は、日本全国でインキュベーション施設が数多く生まれた時期でした。中でもMEBICはアート・演劇・デザイン・映像の拠点があ

り、クリエイティブな雰囲気を持つ大阪市北区東エリアという立地を活かし、「クリエイター・デザイナー特化」という特徴をもって開設されました。「公的なクリエイター専門インキュベーション施設としては、全国2番目」というように、注目を集めてスタートを

切った一方、所長に着任した堂野氏は元シンクタンクの研究員であり、クリエイターの世界は完全に未知の領域。アウェーからのスタートでした。それでも堂野氏は自転車でおフィスを一軒一軒回り、施設の趣旨を説明してネットワークの仲間を増やしていったといいます。

堂野氏がMEBICで開設時から貫いてきたコンセプトは「顔の見える関係をつくる」というもの。「フランクにコミュニケーションを取って、そのつながりが結果的にビジネスになっていく」、そんな場の設計に挑んできました。

このコンセプトが試練にさらされたのが2020年のコロナ禍でした。人と人が顔を合わせるのが核心のMEBICに、「密」を避けなければならない緊急事態宣言が直撃したのです。オンラインでの対応を試みたといいますが、リアルな場で生まれる関係とは程遠いと感じたといいます。「リアルの間では50人が集まって、

MEBIC入り口のイベント告知ディスプレイ。2026年3月時点でイベントの総参加者数は18万人を超える

すべての人がそれぞれ話せば約2,500通りの出会いが生まれます。しかしオンラインMTGではどんなにルームを分けても、せいぜい数人話せるくらい」。逆にリアルな場の価値を再認識した経験となり、オンラインMTGが一般化した今も顔を合わせることにこだわり続ける理由になっています。

● 現役クリエイターだからこそできる、実のあるサポートとコミュニティの充実化

MEBICの特徴は、クリエイターと企業とをつなぐコーディネーターに、現役クリエイターを起用していることです。多くの施設では、OB・OGクリエイターや、税理士・中小企業診断士といった士業の人材がサポートにあたりますが、MEBICでは現役クリエイターがその役割を担います。支援される側の人々が、支援する側に回るという一見不思議な形態ですが、「現役なら同じ目線で、今の生の言葉で答えられる。これが大事なんです」と堂野氏はその意義を語ります。

コーディネーターは数年で入れ替わり、常に現役が担い続ける仕組みです。開設から20年以上、これまでのべ約300人がコーディネーターとして関わってきました。既存メンバーが新メンバーを呼び込み、その人がやがてコーディネーター側に回る——堂野氏が「友釣り方式」と呼ぶこの循環が豊かなコミュニティを育んできたのです。

● あらゆる方向から出会い、つながる多彩なプログラム

MEBICの活動は、クリエイターが「出会う・発信する・つながる・学ぶ」の4本柱。中でも特徴的なのが「出会う」を担う交流イベント「Mebic Talk-in」です。テーマも決めず、何時に来てても帰ってもいいこの交流会は、開設時から続けていることのひとつ。「テーマを決めると専門家同士の情報交換で終わる。そうでなく全く関係ない人同士が偶然引き込まれる、それが大事なんです」と堂野氏は語ります。このほか、企業が案件をプレゼンしてクリエイターが手を挙げる形式の「クリエイター募集プレゼン」、反対にクリエイターが企業が得意技をプレゼンする「シーズ発表会」、特定の課題

について語り合うクローズドな「クリエイティブクラスターミーティング」など、出会いの形を複数用意しています。こうして設計された場から、様々なコラボレーションが生まれていくのです。

● 【メビック発のコラボ事例①】 クリエイター×企業 | 技術力をまっすぐ伝える、モノクロのカッティングマット

(株)ミワックスの「The Cutting Mat」は、MEBICのクリエイター募集プレゼンをきっかけに生まれたプロダクトの一つ。同社の取締役・美馬徹也さんが「カッティングマット以外の商品を作りたい」とプレゼンに登壇したところ、(株)モート商品デザインの正田勝之さんは「そうでなく、カッティングマットのブランディングをすべき」と切り返したといいます。同社のカッティングマットは、軟質のポリ塩化ビニル（PVC）で硬質のPVCをサンドした形の三層構造により、カッターの刃通りの滑らかさと、変形の起こりにくい強さを両立する、高い技術力が必要なプロダクトです。この構造で国際特許も取得し、定番品として愛されてきました。品質には問題がない一方で、当時はカラーラインナップが緑色しかありませんでした。そこで正田さんはブラックとホワイトの2色展開を提案。カッティングマットそのものの持つ完成度の高さを、まっすぐに伝えるためのデザイン・ブランディングでした。長らく緑色だけでやっていただけに社内では抵抗感もあったといいますが、発売後は大きな反響を得ることに。グッドデザイン賞ベスト100を受賞するなど、現在では多くの支持を集める存在になっています。



(株)ミワックス「The Cutting Mat」

●【メビック発のコラボ事例②】 クリエイター×クリエイター | 異分野でチーム を組んだメタバース開発

「目的がないということは、イノベーションのきっかけになりやすい」と堂野氏がいう通り、テーマのない交流会、「Mebic Talk-in」から生まれた新事業は多くあります。その一つがクリエイティブチーム「メタつく〜る」のプロジェクト。

メタバースに熱中する広告クリエイター・榛木富三さん（HARIKI ind.）が「Mebic Talk-in」に参加するようになったことがきっかけで、自身が主催するメタバースの勉強会にもクリエイターたちが集まるように。「もしメタバースがテーマのイベントで出会っていたらこうはならなかった」と堂野氏がいう通り、そこは、分野の垣根を超えた多様なクリエイターが集う場になっていきました。その後、古賀印刷株の竹田保さん、映像クリエイターの今西優太さん、イラストレーターの坂野愛子さん（aicopan）の4人でメタバース制作チーム「メタつく〜る」を結成。大阪府柏原市「亀の瀬地すべり歴史資料室」のリニューアルに際し、展示室と地下空間を仮想空間で体験できるコンテンツを制作すると、続いてIT系4企業のメタバース展示場を制作・公開。異分野のクリエイターが集ったプロジェクトは次のステージへと進んでいます。

● 大阪からグローバルへ。リアルの価値が輝く 未来に向けて

MEBICは以前から、大阪のクリエイターのクリエイティビティを刺激し、視野を広げるために、海外との交流の機会を大切にしてきました。イタリアへのデザイン研修ツアーもその一つ。デザインの本質を追求してきた現地の実践者たちとの交流は、参加者に「人が変わる」ほどの刺激をもたらしてきたといいます。

さらに、大阪・関西万博が転機となり、国内外から人や情報、ビジネスの機会が一気に集まる中で、都市間のクリエイター交流が加速。ドイツ・ハンブルグ市のクリエイティブ支援施設「ハンブルグ・クリエイティブ・ゲゼルシャフト」との交流が始まり、インドデザイナー協会ベンガルール支部とも相互訪問が始まるなど、国際的なネットワークは着実に広がっています。

刺激を受けるための海外から、ビジネスの機会としての海外へ——MEBICの視野と国際的な役割は、新たなフェーズに入りつつあります。

MEBICの今後について「リアルなコミュニケーションだけにこだわってきたMEBICの価値が、AIが発達するほど認められていく気がしています」と堂野氏は晴れやかに展望を語りました。

人と人とが出会い、つながりからビジネスが生まれる。そのコンセプトは設立から20年以上が経った今、より輝きを増しています。



実際の様子を再現した展示室と現実にはない地中空間を体験できるメタバース

塩ビとファッションが交差する場所。 「第157回プレタポルテ展」開催 ／学校法人上田学園 上田安子服飾専門学校



近年、ポリ塩化ビニル（PVC）はハイファッションの世界でも注目される素材になりつつあります。海外の著名ブランドがコレクションで取り上げるなど、その透明感や光沢感がファッション素材として高く評価されているのです。

大阪・梅田に拠点を置く上田安子服飾専門学校の「プレタポルテ展」も、早くからファッションにPVCを取り入れてきた場の一つ。今年も学生たちがPVCを使ったオリジナルブランド『EDEN 01』を立ち上げ、9体の衣装を作り上げました。今回は産学官連携推進室副室長の濱屋但先生と、制作に臨んだ学生たちにお話を伺いました。

学校法人上田学園 上田安子服飾専門学校

大阪市北区に位置する、日本有数の服飾専門学校。1941年の開校以来、独自のカリキュラム、優れた講師陣、充実した設備でファッション業界のトップで活躍するプロを育成している。企業と連携したカリキュラムなどを通じて、高度な職業教育も実践。創設者の上田安子氏がクリスチャン・ディオール氏から受け継いだ感性や技術を継承しながら、次世代のファッション界の担い手を育成している。



担任の江田先生（左）、学生の皆さま（中央）、濱屋先生（右）

● 2011年から続く産学連携。多彩なコラボのあゆみ

上田学園は、業界との連携教育に力を入れてきた学校です。スポーツブランドとのユニフォームデザイン、大阪府警との自転車用ヘルメットカバーの開発、2025年の大阪・関西万博ではパナソニックと連携しパビリオン「ノモの国」のファサード素材を使ったバッグやウェディングドレスを制作するなど、その規模も幅も年々広がっています。「産学連携プロジェクトを通じて、製作現場の様子を学び、自分のデザインイメージを表現するために必要なものを身につける機会になっ

ています」と濱屋先生は産学連携の意義を語ります。

中でもPVC関連の産学連携は2011年より継続しており、様々な企業・団体とコラボしながらドレス・レインウェア・チャックノート・自転車用サドルカバー・ビーチサンダルなど多彩なアイテムを手がけてきました。森川ゴム工業所とのレインブーツコラボレーションは7～8年にわたって継続。透明な塩ビのブーツの内側に、学生がデザインしたカットソー素材をインジェクション成形で一体化させるこの取り組みは、毎年全く異なるデザインで進化し続けています。こうした経験は卒業後にも生きており、上田学園でPVCコラボを

経験した卒業生が就職先でPVCの特性を活かした改善提案をするなど、学生時代の学びが仕事に結びついた事例も生まれています。



こうした長年の歩みと経験が結実する舞台として毎年大きな注目を集めるのが、上田学園の「プレタポルテ展」での学生ブランドの発表です。今年の第157回プレタポルテ展は6月12日・13日、グランフロント大阪北館1階にて開催。衣装の展示とファッションショーが行われ、学生たちがPVC素材を使って制作したオリジナルブランドを発表しました。

● ビニールハウスから生まれたブランド「EDEN 01」

今回取材したのは、ファッションクリエイター学科オートクチュールコース3年生の学生たちが立ち上げたオリジナルブランド「EDEN 01」です。クラス内のプレゼンから選考を経て選ばれた9つの衣装がランウェイに上がりました。



ブランドコンセプトは「透明な膜の中に存在する、儚く、静かな楽園」です。PVCを外側から身を守る「保護膜」と捉え、その内側に繊細な美しさを閉じ込めるというテーマだそう。発案した水谷花音さんは農業高校出身。ビニールハウスが日常にある環境で育ったことから、PVCが花や野菜を雨風から守る様子を身近に見てきました。そんな実体験から着想したブランドコンセプトでした。制作された衣装には、PVCの中に、色とりどりの花があしらわれています。「透明なポケットの中にお花を入れることで、小さな楽園が生まれたら。花っていずれ枯れてしまうものだと思うんですけど、透明な膜の中に一瞬の美しさを閉じ込めたかった」と水谷さんは話します。

● 一発勝負の縫製——素材との格闘と発見

明確なコンセプトが定まっても、実際の制作は試行錯誤の連続で、簡単なものではなかったといいます。最も苦勞したのは、一度縫うと針穴が残り、縫い直しができないという点です。布なら縫い間違えてもほどこいてやり直せますが、PVCは針を通した跡が消えません。「ミシン跡が残りやすく、修正ができないため、事前に縫う順番やパーツ構成を細かく調整して制作を進めました」と水谷さんはその工夫を話しました。

一方で、PVCならではの発見もありました。布では丸みを帯びた形をキープするために芯材を入れる必要がありますが、PVCは素材自体にハリがあるため、それなしでも形が保てます。その特性を活かして、美しい曲線を作った衣装もありました。

また「PVC同士はくっつく性質があるため、カーブ同士でもまち針を使わずに縫い進められて大変助かりました」「引っ張ると伸びるので、指で押して形を整えながら制作を進めました」と語った学生も。布にはない素材の特性が、思わぬ形で制作を助けてくれることもありました。完成後は、「見たことのない透明なバルーンジャケットが完成して、嬉しかった」「PVCの使い道が私の中でとても広がった」「塩ビシートの広がりがとてもかわいく、想像以上の仕上がりになった」といった喜びや達成感が伺える声が多く聞かれました。



ブランドを発案した水谷さんと、制作した衣装

● 9つの衣装に込められたデザインと工夫

9体それぞれのデザインも個性豊かです。

ブランドの発案者・水谷さんはバルーンスカートを制作。PVCのハリ感を活かした丸みのあるシルエットで「包み込まれるような安心感と柔らかい空間」を表現しました。素材自体が持つ立体感と、光を通した時の美しさに、完成に近づくにつれ「PVC素材ならではの表現力」を感じたといいます。

コルセット部分にレースを組み合わせ、土台が透けて見えるデザインに仕上げた学生は、制作前にホームセンターでPVC素材のテーブルクロスを購入。家族から「これが服になるのか」と言われたその素材が、完成するにつれ「可愛い」という評価に変わっていった



といいます。身近な素材が持つギャップが新鮮な驚きをもたらした、象徴的なエピソードです。

他にも、ランドガールをモチーフにしたトレンチコート・ワーク風のデザイン、布と一緒にPVCを縫い込んでビスチェに仕上げた作品、反射をアクセントとして効かせたシンプルながら印象的な一着、薄くやわらかいPVCを布感覚で扱ったパンツスタイルなど、趣向を凝らした作品たちが生まれました。

「PVCで服を作るというのはあまりない経験だったと思うのですが、学生の思い切った感覚でうまくデザインされています」と濱屋先生は語ります。

● ショーを終えて。学生の世界を広げる経験

大盛況のうちに幕を閉じたショーについて濱屋先生は「軟質塩ビを使い、各自の世界観で捉えた『楽園』をテーマに、PVCならではの特徴を活かしてロマンティックなファッションスタイルを表現してくれました。作品の展示やファッションショーでの発表を通して、PVCの魅力がたくさん詰まったデザインを提案できたのではないかと思います」と振り返ります。また、学生たちはコラボレーションを通してPVCが環境問題の観点からも優れたエコ素材であることを学びました。「ファッションの世界でもSDGsを考えることが必須になってきています。在学中にSDGsについて学ぶことで、卒業後の仕事にも必ず生きてきます」とし、「今回の経験から得たものを生かし更なる飛躍につなげて欲しいと思います」と濱屋先生は期待を込めて語りました。

● 若い感性が、素材に新たな命を吹き込む

初めて向き合うPVCという素材は、学生たちに苦勞をもたらしながらも、布にはない発見と表現の可能性を開いてくれました。若い感性がPVCに新たな命を吹き込み、PVCもまた、ファッションという新たな舞台で可能性を広げていく——上田学園のプレタポルテ展は今年も、その豊かな循環を示しました。

取材協力：オートクチュールコース3年

柴田菜悠さん／鶴田結希奈さん／富田眞由美さん／尚山夢乃さん／野口歩華さん／藤原志帆さん／水谷花音さん／村田心愛さん／吉川紗希穂さん

広報だより



▶ PVCニュース コラム

“中東情勢”という歴史的出来事のなかで、基本に立ち返る

2026年春以降の中東情勢の緊迫化によって全世界が翻弄されています。半世紀前のオイルショック時のような状況には至っていないものの、製品不足や物流の混乱など、経済活動の現場では少なからぬ影響が生じています。6月17日の米国とイランの停戦合意など收拾への努力は続いています。依然、楽観できる状況にはありません。先が読めない状況においてこそ、自らの活動の基本に立ち返る姿勢が求められています。

5月19日に塩ビ工業・環境協会（VEC）および塩化ビニル環境対策協議会（JPEC）の総会では、役員改選があり、新体制となりました。厳しい外部環境のなか、2026年度の方針と役割について、あらためて確認する場となりました（5/28「メルマガNo.824」）。2025年度の塩ビ樹脂の生産・出荷量は前年を下回り、2026年度も中東情勢をはじめ国際情勢の影響が懸念されています。また、資源循環やサステナブル社会実現に向けた「脱・プラスチック」の動きが加速するなか、塩ビ産業を取り巻く環境はますます厳しくなっています。しかしながら、こうした状況にあっても塩ビの素材としての特性と社会的価値は一層重要になってきます。耐久消費財としての長寿命性、省資源性、リサイクル性能や難燃性能、さらにはLCAの観点からみた環境負荷評価など、塩ビの優位性は循環経済推進やカーボンニュートラル実現に貢献するうえで大きな意義をもっています。協会では、これらを科学的知見に基づき実証し、社会に継続的に情報発信していくことを方針として掲げています。

VECの設立は1998年、ダイオキシン問題などを背景に塩ビに対する一方的な批判が吹き荒れていた時代でした。そのような状況のなか、問題解決に向けた具体的な行動と、それに裏付けられた適正な情報提供を通じて塩ビが社会と共存していく道を切り拓くことがVECの原点でした。初代会長の所信に示された「社会への貢献と負荷をバランスよく評価する」という考え方は、現在においても協会活動の根底にあるものです（6/11「メルマガNo.825」）。

現在では、関係者の長年の努力により塩ビに対する誤解はかなり解消されてきていますが、海外を含め、いまだに過去の風評が残っていたり、塩ビのイメージダウンにつながる情報が持ち出されたりしています。こうした状況を踏まえ、協会では科学的知見に基づく環境・安全面での情報発信はもちろん、塩ビ製品が豊かな生活にいかに関与しているかを伝えるイベントも積極的に行っていく考えです。

中東地域だけではなく世界各地で不安定な情勢が続くなか、将来を見通すことは容易ではありません。だからこそ状況変化に適切に対応しつつ、設立当初からの軸をぶらすことなく、基本に立ち返った活動を着実に積み重ねていくことが、未来の塩ビ産業および協会活動にとって重要であると考えます。

（塩田克博）



編集後記

「ナフサ」という語が、新聞やニュースを賑わしています。naphthalは、普段使われるoilやpetroleumとは異なる語源を持ち、紀元前18世紀頃の古代バビロニア王国のアカド語（楔形文字）のnaputluにまで遡ります。近年では、原油精製時に得られる揮発性が高く軽質な留分を指す名称として使われています。当初は扱いにくい物質だったものが、いまや、さまざまなプラスチックの原料として価値を持ち、その供給は世界情勢にも影響を及ぼしています。

今号では、長年培われてきた技術や知見を生かし、新たな製品や価値として世界へ広げてきた企業や団体を取り上げました。歴史に学び、今に生かす姿勢が随所に感じられます。また、MEBICの「顔の見える関係」が生むクリエイター同士のコラボレーションや、上田学園による塩ビを使った服飾デザインにおける異質なものの組み合わせにも、これまで見過ごされてきた価値が息づいています。私たちの周りには、まだ未知の可能性が眠っているのではないのでしょうか。

（塩田克博）

お問い合わせ先

塩化ビニル環境対策協議会 Japan PVC Environmental Affairs Council

〒104-0033 東京都中央区新川1-4-1（住友六甲ビル8F）

TEL 03(3297)5601 FAX 03(3297)5783 <https://www.pvc.or.jp/index.html>

